

繊維市況と需給動向

ならびに輸入依存度について

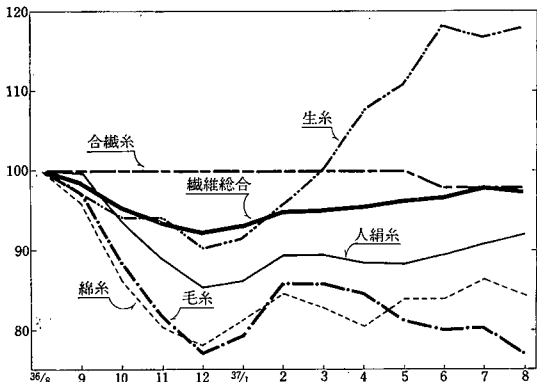
あらためて指摘するまでもないが、近年繊維の需要分野には著しい構造変化が進んでいる。したがって繊維については、一口に繊維として概括的に取り扱うことには問題がある。中に含まれる個々の品目の動きに即して検討するなり、需要構造の変化が全体の動きにどう影響しているかをみる必要がある。ここでは、その角度から繊維市況と輸入依存度の問題を若干検討してみることにする。

1. 需給と市況の動向

(1) まず、引締め後における繊維市況の動きをみよう。繊維は、引締め後その他の品目より早く急落し、そのため生産調整による需給バランス回復の努力も比較的早く行なわれた。本年初めには、すでに市況が落ち着きを取り戻し、その後6月ごろからはむしろ小戻して現在に至っている。本行の卸売物価指数により、繊維価格(全品目の総合)の推移をみても、昨年8月をピークに昨年末までの間 8.0% の大幅下落(同期間における食料を除く卸売総平均、-1.7%)をみたが、本年にはいり8月までに+6.2%の反騰をみている。

金融引締め後の品目別価格推移

(第1図)



(注) 本行「卸売物価指数」による。
36年8月=100
絹糸、人絹糸は国内向け価格。

しかしこれを品目別にみると、第1図にみるとおり区々の動きがみられる。すなわち年明け後の

小反発は、供給が不足している生糸、絹織物(価格上昇に対する寄与率53%)と原毛など一部素材(同31%)の上昇が主因である。その他の品目では本年初めごろには買上げ実施などをはじめとする市況対策をはやした一時的な戻しもあったが、まもなく実勢悪に冷やされ軟調な地合いが続いている。ことに毛糸は、需給の実勢が悪く最近かなりの軟化をみせており、綿糸も多少の需給改善傾向にあるとはいえ、7月ごろの戻し歩調から再び軟化を示している。人絹糸は設備廃棄などかなり減産体制が進みつつあるので、このところやや持ち直し気味であるが、なお小幅の安値訂正といった程度にすぎない。しかし、この間、合繊維だけは、昨秋における他品目の暴落時も含めて、これまで一貫した強保合いを続けている(第1図で合繊維価格が6月に下落しているのは、政府勧告によるナイロン建値引下げが行なわれたため)。

(2) なお、ここで、今回の景気循環の全過程における繊維価格の動きをみると、第1表にみるとおり、繊維全体でみた卸売物価は、昭和33年12月をボトムに36年8月(ピーク)までに10.8%上昇したあと、36年12月までに8.0%の下落をみせたにとどまっている(この間の復元率81.8%)。しかもその後現在までに6.2%の上昇をみ、現在の水準は33年12月のボトムより8.3%高いところにある。

しかし、この間における内訳をみると、綿糸、

(第1表)

繊維(卸売)物価の推移

	指数 (27年=100)				騰 落 率			
	A	B	C	D	B/A	C/B	D/C	D/B
	ボトム 33/12	ピーク 36/8	ボトム 36/12	現在 37/8	%	%	%	%
繊維	71.0	78.7	72.4	76.9	+10.8	-8.0	+6.2	-2.3
素 材	65.2	71.2	66.2	71.9	+9.2	-7.0	+8.6	+1.0
原 糸	66.7	73.9	63.1	69.5	+10.8	-14.6	+10.1	-6.0
(綿 糸)	70.6	70.9	56.2	60.2	+0.4	-20.7	+7.1	-15.1
(毛 糸)	54.0	57.9	44.6	45.0	+7.2	-23.0	+0.9	-22.3
(人絹糸)	75.9	78.1	67.6	72.6	+2.9	-13.4	+7.4	-7.0
(スフ糸)	60.7	62.4	53.7	55.7	+2.8	-13.9	+3.7	-10.7
(合繊維)	65.9	65.9	65.9	64.5	保合	保合	-2.1	-2.1
(生 糸)	67.2	110.3	99.5	130.0	+64.1	-9.8	+30.7	+17.9
織物・その他	77.1	86.2	82.3	84.9	+11.8	-4.5	+3.2	-1.5
うち(絹織物)	87.1	118.9	119.0	136.2	+36.5	+0.1	+14.5	+14.6

(第2表)

一人当り衣料用消費量推移

(単位・kg)

	昭和29年	30	31	32	33	34	35	36
綿糸	2.55 (-6.5) (93.1)	2.38 (-6.7) (86.9)	2.95 (+23.9) (107.7)	2.91 (-1.4) (106.2)	2.43 (-16.5) (88.7)	2.64 (+8.6) (96.4)	2.71 (+2.7) (98.9)	3.04 (+12.2) (110.9)
毛糸	0.75 (-17.6) (82.4)	0.82 (+9.3) (90.1)	0.98 (+19.5) (107.7)	1.00 (+2.0) (109.8)	0.84 (-16.0) (92.3)	0.98 (+16.7) (107.7)	1.09 (+11.2) (119.7)	1.17 (+7.3) (128.5)
人絹糸	0.39 (-4.9) (95.1)	0.39 (±0) (95.1)	0.41 (+5.1) (100.0)	0.48 (+17.1) (117.1)	0.18 (-62.5) (43.9)	0.45 (+150.0) (109.8)	0.53 (+17.8) (129.3)	0.49 (-7.5) (119.5)
スフ糸	0.80 (-1.2) (98.8)	0.89 (+11.3) (109.9)	1.11 (+24.7) (137.0)	1.12 (+0.9) (138.2)	0.69 (-38.4) (85.2)	0.84 (+21.7) (103.7)	0.95 (+13.1) (117.3)	0.96 (+1.1) (118.5)
合 織	0.09 (+50.0) (150.5)	0.16 (+77.7) (266.8)	0.28 (+75.0) (465.7)	0.41 (+46.4) (683.3)	0.44 (+7.3) (773.3)	0.61 (+38.6) (1,016.6)	1.08 (+77.0) (1,800.0)	1.21 (+12.0) (2,016.0)
合 計	5.37 (-4.6) (95.4)	5.61 (+4.5) (99.6)	6.70 (+19.4) (119.0)	6.71 (+0.1) (119.2)	5.40 (-19.5) (95.9)	6.30 (+16.7) (111.9)	7.08 (+12.4) (125.8)	7.62 (+7.6) (135.3)

(注) カッコ内は前年増減比%
通産省調べ。
ゴデック体数字は28年=100とした指数

毛糸、人絹糸、スフ糸は好況期における上昇分を大きくこえる下落を示している。最近における小戻し後の水準でみても、なお33年末のボトムをかなり下回っている(現在の水準、33年末比、綿糸85.2%、毛糸83.3%、人絹糸95.6%、スフ糸91.7%)。しかし、この間、合織は前述の建値引下げを除いては、保合をつづけている。また、生糸、絹織物は好況期および最近における上昇幅が著しく大きく、36年8月～12月の下落期においても、生糸は9.8%の下落にすぎず、絹織物はかえって微騰が続いた。なお、繊維素材(繭、羊毛など)はボトム時までには小幅の下落にとどまったうえ、本年初来むしろかなり反騰しているの、現在の水準は前回ピークを上回っている。このように品目別にみると、繊維全体の卸売価格とはかなり違った動きが含まれていることを見のがしてはならない。

(3) そこで、このような市況動向の背後にある需給を、品目間にわたる構造の変化という点からみしてみる。それは一言でいえば、天然繊維、再生繊維の伸び悩みに対し、合織の伸びがとくにここ数年間著しいということである。たとえば繊維の内需を示す一指標として、国民一人当りの衣料消費量(第2表)をみると、合織の消費はすう勢的に

強い上昇を示し、ここ数年間に、綿糸の消費量の4割に達し、毛糸、人絹糸、スフ糸などの各消費量をしのぐに至っている。景気下降期においても合織の消費量は増勢こそ幾分鈍化するとはいえ、天然繊維、再生繊維のような減勢を示さず、また、好況期においては他繊維の消費をはるかに上回る伸びが続いている。

このような需要動向の相違は、当然のことながらそれぞれの生産状況にも反映している。天然繊維が繊維工業設備臨時措置法(昭和31年施行)による設備規制をうけてほとんど常時操短が続けられている(景気上昇期においても増産率は年間+10～15%程度)のに対し、合織も同様に規制を受け

(第3表)

主要繊維品の輸出実績

(単位・百万ドル カッコ内構成比)

	綿	毛	絹	スフ	人絹	衣類	合織	総 額
32 年	344.1 (33.9)	65.8 (6.5)	74.1 (7.3)	174.2 (16.7)	89.1 (8.8)	142.7 (14.1)	8.8 (0.9)	1015.0 (100.0)
33	297.7 (33.7)	47.7 (5.3)	56.8 (6.4)	141.2 (15.8)	71.8 (8.0)	148.9 (16.7)	12.9 (1.4)	891.7 (100.0)
34	309.0 (30.0)	60.9 (5.9)	96.3 (9.3)	125.9 (12.2)	63.9 (6.2)	206.6 (20.0)	19.8 (1.9)	1030.9 (100.0)
35	403.8 (33.0)	69.4 (5.7)	102.6 (8.4)	131.3 (10.7)	77.7 (6.4)	220.6 (18.0)	31.8 (2.6)	1223.4 (100.0)
36	380.8 (33.0)	51.4 (4.4)	80.6 (7.0)	113.4 (9.8)	79.9 (6.9)	191.1 (15.5)	41.7 (3.6)	1155.5 (100.0)
37/1-6	164.2 (29.1)	33.3 (5.9)	44.4 (7.9)	46.1 (8.2)	42.6 (7.6)	90.5 (16.0)	42.8 (7.6)	564.0 (100.0)

(注) 大蔵省「通関統計」による。

(第4表)

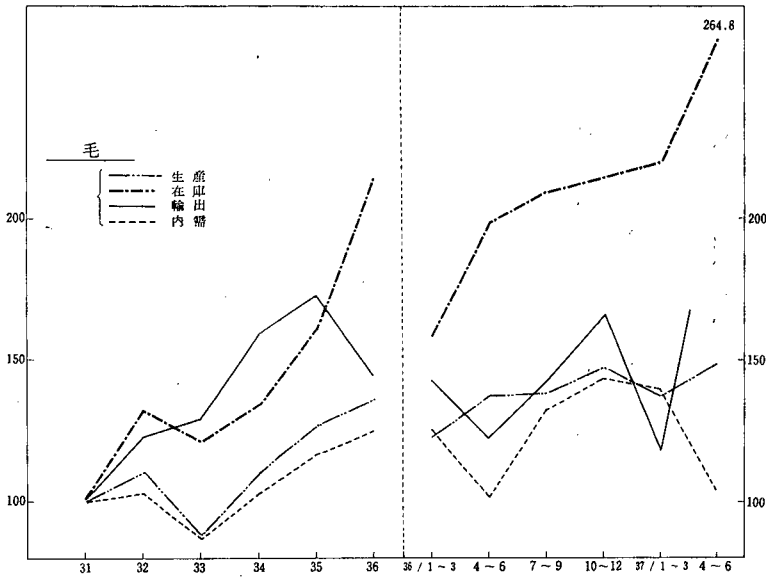
綿、合織の主要輸出先別推移

(上段、合織、カッコ内 綿、単位・百万ドル)

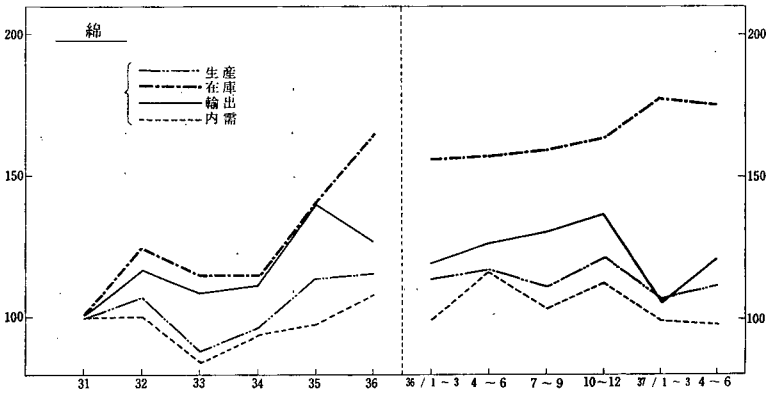
	32 年	35 年	36 年
東 南 ア ジ ア	2.7 (167.8)	8.1 (169.6)	10.7 (152.8)
欧 州	0.1 (31.8)	2.9 (35.2)	4.4 (35.2)
ア メ リ カ	0.1 (17.7)	0.4 (22.0)	1.2 (23.4)
ア フ リ カ	0.5 (35.3)	4.9 (62.0)	4.4 (70.8)
オーストラリア	1.0 (22.6)	2.1 (45.3)	2.8 (33.8)
韓 国、台 湾	2.9 (0.4)	4.8 (0.1)	8.4 (—)
合 計	8.8 (344.1)	31.8 (403.8)	41.7 (380.8)

(注) 日本貿易年表および繊維統計年報による。綿は綿糸と綿織物、合織は合織綿、合織糸、合織織物の各々の集計。なお本年にはいってから、東南ア、欧州アフリカ向けに合織の伸張、綿の停産傾向が顕著。

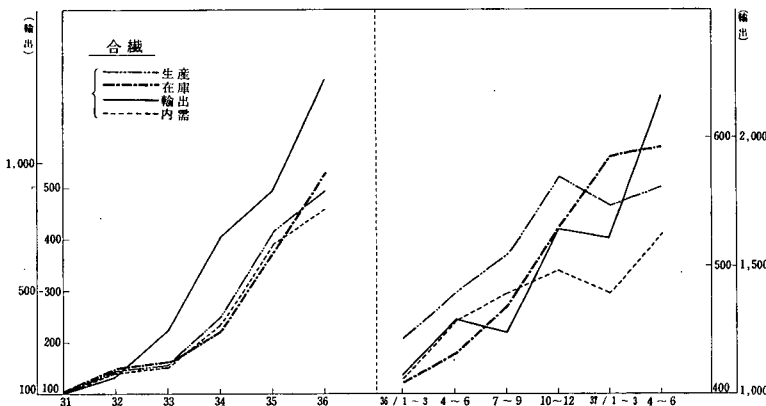
(第 2 図)



(第 3 図)



(第 4 図)



たとはいえ、需要増に応じ
て増設(日産能力、34年末
323トン、37年6月末553
トン、その間の能力増71.5
%)が認められ、生産も目
立った伸びを続けている。
この結果、原糸段階でみた
各種繊維の生産構成比率は、
かなりの変化(昭和30
年、天然繊維66%、再生纖
維31%、合纖2%、37年
1~6月現在それぞれ、58
%、24%、16%)を示してい
る。

(4) 以上の基本的動向を
念頭において、とくに今回
の引締め強化後における需
給の動きを品目別にみてみ
よう。第2~4図に明らか
なように、綿糸は引締め強
化よりやや以前から内需不
振を主因に市況が低迷し、
引締め後生産はむしろ減勢
の大勢にありながら製品在庫
はかなりの高水準を続けて
いる。毛糸もほぼ同様の動
きを示し、とくに最近では
内需のなさえが大きく、製
品在庫の急増をみている。
以上に対してひとり合纖は
輸出、内需の堅調にささえ
られて生産も伸び、市況も
強保合いを続けている。も
とより36年以降の動きを細
かく見れば、合纖にも内需
に若干の増勢鈍化傾向がみ
られるが、その代わり輸出
の増大が著しい。ちなみに
最近の繊維製品の輸出を品

目別(第3.4表)にみれば、天然繊維などが後進諸国の自給度向上や、各国の輸入制限措置の拡大によって減退傾向が目立っているのに対し、合繊だけはとくに後進国向けを中心に大幅な伸長が目立っている。こうした需要の伸びを反映して、合繊の生産は最近でも増勢を続けており(アクリル系、ナイロン短繊維も本年4月以降操短をほとんど解除)、製品在庫も上昇しているとはいえ生産の動きとはば見合っている(在庫率は引締め直前と同水準)。

2. 繊維の輸入原材料依存度

(1) 次に最近における繊維原材料の輸入動向についてみると、原綿・原毛など原材料の在庫食いつぶしが進む一方、天然繊維、再生繊維業界の減産傾向が全体の輸入水準を引き下げている。後者の要素は、取りも直さず繊維生産の輸入依存度が循環的低下をみつつあるということにほかならない。そこで、ここでは、上記品目別需給構造の変化などを考慮しつつ、繊維生産の輸入依存度の問題を、若干みてみることにする。

(2) 輸入依存度の計算には種々の方法があるが、①まず、各種品目を総合した生産、消費指数を作成する場合いかなるウェイトを用いるかという問題がある。ここでは、各種原糸の生産を、糸量(トン)で単純に総合することとした。(注)

(注)1. このように各種原糸をそのまま総合したことに関が残されていることはもちろんである。

2. 輸入依存度の計算は輸入原材料消費の生産あるいは原材料消費に対する比率でみるのが普通の方法であり、以下にみるとおり、原糸生産量のうち輸入原材料を使用する分の生産比率をとることは、一見消費と無関係であり、輸入依存度を説明するものでないようにみえるが、後述のとおり、輸入原材料の原単位向上による影響についての計算などでは輸入原材料の消費量を基にしているため、ここでとりあげられる輸入原材料を使用する原糸生産量は輸入原材料消費を反映したものと見える。

② 原糸生産量のうち、国産原材料使用分(合繊、再生繊維のうち国産原材料使用による生産分)と輸入原材料使用分中原単位向上による増産分を算出し、輸入原材料を要する生産と要しない生産との比率により、輸入依存度について一応のめどをつけてみることにした。

(3) 以上の計算の結果によると、第5表にみるとおり、輸入依存度の大勢は低下の方向を示して

原糸総生産量(合繊糸生産量+輸入原材料使用分のうち原単位向上による生産増量+再生繊維糸国産原材料使用輸入依存度=分の生産量)

原 糸 総 生 産 量

(注1) ①原糸総生産量は綿糸、毛糸、再生繊維糸、合繊(合繊糸と合繊綿の長繊維)の生産量合計。②合繊糸の原材料はほとんど国内で調達。天然繊維糸(綿糸、毛糸)は100%輸入に依存。再生繊維糸(人絹糸、スフ)は、溶解バルブの一部を輸入に依存。

(注2) 原単位向上ないし低下による増産ないし減産分は下記によって計算。

28年における原単位(綿糸1.129、毛糸0.702)を基準とし、以後の実際消費量につき28年当時の原単位の下で生産しうる原糸生産量を計算し、実際生産量との差額をとる。再生繊維の原単位向上ないし低下による生産増(減)量は、原糸生産量に輸入比率を乗じた輸入原材料使用分について綿糸、毛糸と同様の計算。

(注3) 再生繊維糸のうち国産原材料使用による生産量は、実際の原糸生産量に国産原材料使用比率(溶解バルブの輸入比率の逆数)を乗じて算出。

(第5表)

繊維工業の輸入依存度(1)

	全生産量 A (綿糸+毛糸 +再生繊維 +合繊糸)	合 繊 糸 生 産 量 B	原単位向上 による 生産増量 C	国産原料 使用分 の生産 量 D	E B+C +D	輸 入 依存度 1- E A
	トン	トン (%)	トン (%)	トン (%)	トン (%)	(%)
28 年	672,252	7,458 (5.2)	—	134,645 (94.8)	134,645 (100)	78.9
29	749,747	11,696 (6.4)	8,718 (4.7)	162,689 (88.9)	183,103 (100.0)	75.6
30	759,887	20,482 (8.5)	6,644 (2.8)	213,871 (88.7)	240,997 (100.0)	68.3
31	944,588	36,766 (12.8)	△ 1,348 (△0.4)	251,270 (87.6)	286,688 (100.0)	69.7
32	1,075,958	54,190 (15.6)	△ 1,581 (△0.5)	295,322 (84.9)	347,931 (100.0)	67.7
33	841,346	57,367 (20.4)	10,414 (5.6)	213,495 (84.9)	281,276 (100.0)	66.6
34	977,859	92,882 (26.2)	19,915 (5.6)	241,712 (68.2)	354,509 (100.0)	63.7
35	1,169,590	153,923 (36.1)	28,096 (6.6)	244,681 (57.3)	426,700 (100.0)	63.5
36	1,200,321	184,117 (42.6)	20,638 (4.8)	227,192 (52.6)	431,937 (100.0)	64.0
37/1-6	578,209	102,165 (47.0)	16,469 (7.6)	98,748 (45.4)	217,382 (100.0)	62.4

(注) カッコ内はEを100とした構成比。△印は減少。

(第6表)

輸入依存度の変動要因

	原 単 位 (トン)			溶 解 バ ル ブ の 輸 入 比 率 (%)				生 産 シ ェ ア ー (%)	
	綿 糸	毛 糸	再 生 繊 維	天 然 繊 維 (A)	再 生 繊 維 (B)	(A)+(B)	合 成 繊 維		
28年	1.129	0.702	1.051	26.1	74.0	24.2	98.2	1.0	
29	1.111	0.698	1.033	27.6	71.3	26.6	97.9	1.4	
30	1.122	0.681	1.023	20.1	66.1	30.7	96.8	2.4	
31	1.121	0.757	1.013	23.2	64.6	31.1	95.7	3.5	
32	1.109	0.796	1.005	24.9	60.9	33.6	94.5	4.6	
33	1.087	0.770	0.995	20.4	64.5	28.5	93.0	6.1	
34	1.062	0.780	0.984	21.0	51.8	28.3	90.1	8.6	
35	1.050	0.801	0.973	27.6	59.7	26.6	86.3	12.1	
36	1.051	0.844	0.972	29.2	59.5	24.6	84.1	14.1	
37/ 1-6	1.037	0.790	0.969	34.9	57.8	24.2	82.0	16.3	

(注) 1. 通産統計による。

2. 綿の原単位は綿糸1トン当りの原綿消費量。

毛の原単位は毛糸1トン当りの羊毛(羊毛トップ、洗上羊毛)消費量。

再生繊維の原単位は人絹糸、スフ綿1トン当りの溶解バルブ消費量。

3. 生産シェアは原糸段階でのもの。

(第7表)

繊維工業の輸入依存度(2)

	原糸の 生産指数 (A)	原材料 消費指数 (B)	輸入分 原材料 消費指数 (C)	輸入依存度	
				(C) (A)	(C) (B)
28年	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
29	108.7	108.0	104.2	95.9	96.5
30	116.7	118.8	98.1	84.1	82.6
31	145.0	137.5	123.8	85.4	90.0
32	161.8	150.6	134.9	83.4	89.6
33	135.2	137.8	111.7	82.6	81.1
34	167.0	163.5	131.4	78.7	80.4
35	203.5	190.0	152.1	74.7	80.1
36	221.6	203.1	162.1	73.1	79.8
37/1-6	226.4	202.7	153.4	67.1	75.7

(注) 各指数は通産統計による。
ただし、原糸の生産指数は紡績、化繊の生産指数を付加価値ウ
ェイトで乗じて総合したもの。

いる。これを別の方法によった試算(第7表)によ
ってチェックしても、同様のことがいえる。これ
らを総合していえることは、

①34年ころから輸入依存度低下に対する合繊進
出の影響がかなり目立ち、この面からさう勢的な
低下傾向がみられる。もっとも、国産原材料使
用分の再生繊維の比率も急速に低下——これは再
生繊維の生産シェアがかなり下がっているため
——しているが、合繊進出による影響の方が大き
い。(第5、6表)

②景気変動と輸入依存度との相関関係は、上記
のようなさう勢的な動きのうちで余りはっきりし
なくなっているが、しいていえば、調整期におい
ては、依存度が低下し(29～30年、32～33年、37
年1～6月)、景気過熱期には依存度が上昇する
(31年、36年)傾向にあるといえる(第5、7表)。
もっとも、第5、7表とも景気再上昇にはいった
年(34年)に依存度がかなり下がっているのは、こ
のところから合繊の進出がとくに大きく、前述のさ
う勢的低下がかなり目立ちだしたためであり、第
7表において景気過熱時の36年に依存度が微落し
ているのも同様さう勢的低下の大きさに影響され
た動きとみてよかろう。このように依存度が景気
循環にほぼ即した動きを示していることは注目さ

れるところである。その主因は景気調整期には前
述のように(第2表参照)輸入原材料に全部あるい
は一部を依存する綿糸、毛糸、人絹糸、スフ糸の
需要減退、生産比重の減少を招き、景気上昇期に
はそれと反対の動きを示すためと思われる。

③なお、原単位については再生繊維はほぼ一貫
して向上をみせているが、綿糸は、30年、31年頃
から細番手物への需要変化もあり一時原単位の低
下をみているが、大勢としては逐年わずかながら
向上をみせている。これに対して、毛糸は新鋭機
機の設置も綿糸に比べれば、最近のことであり、
需要の高級化傾向もあって、むしろ原単位は低下
傾向にある。

④原単位には、循環的な変動も含まれている。
すなわち、一般的にいて綿糸、毛糸には、好況
期に操業度の上昇により、機械の能率(操短解除
による非能率機械の稼働など)(注)からする原単位
の低下が現われる。これらの要因が前述の景気変
動と依存度との関係にも一部影響していると思わ
れる。

(注) 稼働率指数(下掲、通産省調べ、30年基準)をみると、32年(そ
毛機)、36年(綿紡機)には若干特殊な動きがみられるが、ほぼ上
記のような一般的な傾向をうなずかせる大勢といえよう。

	30年	31	32	33	34	35	36	37/1-6月
綿 紡 機	100.0	108.3	109.8	85.5	88.0	96.1	93.7	80.4
そ 毛 機	100.0	114.6	88.0	78.8	85.2	85.9	96.3	77.8

(4) 以上、原糸生産の面で輸入依存度の変化を
とらえてみた。以上の諸要因による繊維(原糸)生
産の輸入依存度低下が、繊維原材料輸入水準に長
期的に響いてきていることは明らかである。もと
より、実際の輸入量ないし輸入額は、輸入価格の
変動、原材料在庫の積増し、食いつぶしが大きく
影響することはもちろんである。当面の輸入に
は、とくに後者の食いつぶしが大きく響いている。
しかし、同時に景気調整の進展による綿・毛部門
の減産が進み、天然繊維の生産シェアの相対的
低下によって、循環的な輸入依存度低下が起こっ
ていることも、輸入水準低下にかなり響いている
ことは争えない点であろう。

